

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第19号
平成18年6月12日発行
発行所
〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
静岡市観光協会清水支部内
TEL (0543) 54-2420
発行人 竹内 宏
題字 竹内 宏
編集人 田口 英爾
印刷所 株ニシガイ
TEL (0543) 52-2188

次郎長で行かざあ！——町起こしの会立ち上げ

NHKが初めて、次郎長ドラマ全国放映に踏み切った。六月一日から始まった木曜時代劇「次郎長背負い富士」は八月いっぱい全10回で完結する。この機をとらえて清水の町に元気を呼び起こそうと、「次郎長で行かざあのか」が立ちあげられた。



次郎長で行かざあのかの会設立（5月16日）
「清水の再生と文化」を講演する竹内会長

「行かざあのか」設立総会は、去る五月十六日（火）日の出埠頭に近い清水マリニビルで、およそ百三十人が出席して開かれた。集まった顔ぶれは、次郎長翁を知る会の会員を中心に、次郎長道中保存会、清水郷土史研究会、次郎長巷談連など、次郎長をヒーローと仰ぐ、地元ファンの人たちである。会長は当会会長竹内宏先生。なぜこの会が立ちあげられたかといえば、昨年興津公民館で開催された当会年次総会の記念講演で、山本一力さんが話されたように、NHKが「次郎長背負い富士」を取り上げてテレビドラマ化することが正式

「知る会」平成十八年度年次総会開催・六月十二日梅蔭寺で

記念講演「清水と私、次郎長・愚庵のことなど」

斎藤襄治先生プロフィール

大正六年（一九一七）生れ。文芸評論家。京都大学文学部言語学科卒。昭和十八年清水高等商船学校英語教官。米國タートマス大学客員教授、茨城キリスト教大学教授、学長等を歴任。著書に「漱石とサリンジャー」、訳書に「東海道の宿 水口屋ものがたり」など多数。



三保海岸で撮影準備中の中村雅俊さん。撮影 吉井靖
決定したからである。大河ドラマとまでは行かないにしても、木曜時代劇として山本一力原作、ジェームス三木台本により全10回でNHKがテレビ放映するという朗報は、今年のまだ風寒い春先三月頃に飛びこんで来た。

そこで澎湃（ほうはい）として湧き起こったのが、これを清水の町起こしに結びつけようという話だ。清水郷土史研究会会長山田健司氏は愚庵や次郎長研究にも熱心だ。編集子と二人連れ立って過密スケジュールの中の竹内先生に相談を持ちかけ、それではと、動いて下さることになって、趣意書を起草し

世話人会のメンバーに呼びかけて準備を重ねた。
趣意書と世話人の顔ぶれは以下の通り。

「次郎長で行かざあ」の会・設立趣意書

「さあ来いと富士を背中に背負って立つ、男の中の男一匹」。

これは、乃木大将や福澤諭吉と並んで明治三十六年の読売新聞に掲載された次郎長の人物評です。この短い言葉ほど、次郎長の魅力を端的に表したものはありません。

今年NHKは全国放映で初めてテレビドラマとして、次郎長を取り上げます。題して「次郎長・背負い富士」（山本一力原作、ジェームス・三木脚本）です。放映開始は、平成十八年六月から連続十回が予定されています。舞台の中心は清水。主演で次郎長役を中村雅俊、おてふを田中美里、石松は山本太郎、次郎長の父を小林稔侍などの豪華キャストによる撮影も始まっています。

清水を宣伝してくれる千載一遇の好機に、私たちは地元から「清水の次郎長」の名を全国にドカンと発信したいと考えます。名づけて「次郎長で行かざあ」の会を立ち上げ、食いねえ食いねえの食の世界をはじめ、浪曲・講談・映画などのエンターテイメント、史跡探訪のウォーキングやフォーラム等を展開して、清水の町に元気を呼び起こしたい、これが私たちの考えです。

平成十八年三月吉日

世話人代表

竹内 宏（静岡総合研究機構理事長・次郎長翁を知る会会長）

世話人（五十音順）

相澤 誠二（薄墨の笛の会世話人）

天野 香（清水かたりベクラブ代表）

梅原 久義（静岡市観光協会清水支部常務理事）

上田 紘司（清水映画祭運営委員会代表）

田口 英爾（梅蔭寺次郎長資料室代表）

宮城篤一雄（世界寿司フォーラム準備会代表）

望月 栄次（末廣鮎主人）

望月 憲一（清水郷土史研究会理事）

山本 勉（清水商工会議所常務理事）

山田 健司（清水郷土史研究会会長）

吉井 靖（次郎長道中保存会理事長・ヨシイカメラ店主）

会の趣旨に賛同する発起人の顔ぶれには、第一に小嶋善吉静岡市長や、宮城島弘正旧清水市長をはじめ、東京在住の村松友規さんや諸田玲子さん、宝井馬琴師匠が真っ先にご参加になった。とくに旧静岡市から川井祐一静岡鉄道会長や、「徳川慶喜と明治の静岡」推進協議会石川たか子会長、久保田隆浮月楼社長、新門辰五郎の流れを汲む木遣保存会の東嘉会が参加されたのは、心強いサポーターとしてここに記しておきたい。

平成十七年秋の史跡探訪ツアー

石松のルーツ新城市、足助町、岩村町の旅

天野 香

平成十七年十一月九日十日の次郎長ツアーに参加した。朝から快晴にめぐまれ清水駅出発、静岡駅南口から乗車の人たちと合流し、竹内会会長を始め三十二名は、和気あいあいのうちに昼前、洞

ターとしてここに記しておきたい。

五月十六日の設立総会では、山田健司行かざあの会事務局長から、設立に至る経緯と、今後の事業計画についての説明が行われた。事業計画としては、

① 次郎長マップの作成

② 次郎長映画鑑賞会

③ 浪曲・講談を楽しむ集い

④ 次郎長史跡ウォーキング

などのほか、次郎長フォーラムや、食いねえ、食いねえ、寿司食いねえ祭りや、甲田屋跡地建碑などが挙げられた。

会員の一人から、「次郎長翁を知る会のリニューアル（改新）ですか」との質問が寄せられたが、「行かざあ」の会は今度のテレビ放映をきっかけとする町起こしのための「別働隊」であることをここで明言しておきたい。

設立総会の議事が終わった後、竹内会会長による記念講演が行われ、「清水の再生と文化」と題して一時間余にわたり、先生の町おこしの熱のこもった持論が展開された。数かずのイベントは六月を皮切りに展開される。

雲寺（新城市高岡）に着いた。

浪曲でおなじみの石松は遠州森の生まれとされるが、実は、三州堀切の代々庄屋を勤めた家で生まれたという。地元では、万延元年（一八六〇）



六月十七日(土) 山本一力さん来静 講演とサイン会のお知らせ

◎特別講座「山本一力氏が語る次郎長・男の魅力」
NHK文化センター静岡教室主催
■日時——六月十七日(土) 十四時～十五時半
■会場——グランシップ2F

(有料・申込はNHK文化センター)
TEL〇五四―六五三―一三三三(へ)



◎「背負い富士」出版記念サイン会
■日時——六月十七日(土) 十七時
■会場——戸田書店静岡本店

(TEL〇五四―二〇五―六一一一)

次郎長の代参で金刀比羅宮の参詣をすませた帰りに生家に二・三日滞在し、金刀比羅宮のお札やみやげを近所に配ったなどのエピソードが伝わっている。また、石松が都田吉兵衛兄弟に惨殺されたとき同行していた弟が遺体を背負って新城に帰り、菩提寺の洞雲寺に埋葬しようとしたが反対され、首を入れたカメラだけを埋めその上に自然石を置いて弔ったという。(写真は洞雲寺本堂前にて)

その後、新城観光ホテルで昼食をすませ、奥三河の足助町に向かう。

紅葉にはまだ早かったが、足助を流れる巴川にかかる赤い橋を渡り、自然の空気と、音に包まれて川沿いを語らいながら歩くのも楽しい。三州足助屋敷を見学する。

長屋門を入ると右手に牛小屋があり、昨日生まれたという子牛が可愛い目をして母牛にまとわりつきながら出迎えてくれた。母屋、機織、今では見かけない桶屋、傘屋など懐かしい民家が建ち並び、売店では山の幸、民芸品など所せましと並び、老若男女で混み合っている。私は、太田さんとちりめんで作った来年の干支の犬の人形を記念に求め、バスに乗った。足助町白鷺館に泊。

翌十日は岩村の歴史資料館から始まる。岩村藩八百年の歴史が展示されている。ガラスケースの中には古文書、県、町の文化財が並び、日本初の英和辞典は岩村藩校知新館で使っていた。また、城は最も高所にある日本三大山城の一つで、東濃地方から信州の一部まで勢力下に行っていたという。私は旅行前に、郷土史研究会古文書部会長の望月憲一さんから「駿河国の岩村領」についてのコピーを頂いた。

「駿河国の岩村領」には「岩村藩駿河領十五ヶ村は、志太郡の内八ヶ村・益津郡の内二ヶ村・有渡郡の内五ヶ村の村々からなる。横内村に置かれた岩村藩の陣屋には、岩村藩から派遣された代官が着任し、領地の村々の治政に当たった。」とある。岩村藩(岐阜県 駿河領資料展、藤枝市郷土博物館(一九八八年)より)。

有渡郡の内には北脇村、北脇新田村があり、清水と岩村藩と関係があることを知った。私は山の中をバスに揺られながら資料館に着くまで城下町があるなど想像もできなかった。

岩村は竹内会長のお母様の出身地という。町並みの見学では、竹内会長と叔母様の家を探した。会長が「ここだ」と言って声をかけて中に入ると、ご親戚の方がおられ、懐かしそうに再会を喜び合っていた。「元結屋」をしていたそうである。会長は集合時間を気にしながら別れを惜しんだ。

次に訪れたのは、大正時代のたたずまいを残す恵那郡明智町の大正村である。

マップ片手にボランティアガイドに先導されて、黒い羽目板のある路地をぬけ、バラ園を通り洋風

建築をイメージしたロマン館に行く。平成六年にオープンしたという初代高峰三枝子村長の記念館で、中に入ると三枝子の懐かしい「湖畔の宿」の歌声が耳に入る。

外に出ると小高い所に三百年を超える歴史を持つ旧三宅家が復元移築されていた。坂道を下り町

三越劇場「次郎長外伝」観劇ツアーに参加して

鈴木幸江

前列中央小柳ルミ子を囲んで、右が正希光。三越劇場

並に入り、渡り廊下のある家の下をくぐり、うかれ横町の看板を見ながら酒屋、うどん屋が並ぶ当時の面影を残す路地、かつては馬子の唄声やお伊勢参りの人たちが賑わったという街道の交叉点など約三時間で廻る。村全体が現在に息づいたままの大正ロマンに出会える街であった。

平成十八年四月十八日(火)、静岡駅南口は午前七時半、清水駅東口は午前八時それぞれ出発。すばらしい快晴に恵まれ、二台のバスは富士川サービスエリアで合流、美しい富士山を車窓より眺めながら、東京日本橋三越本店へ昼前に到着した。

参加者は、バス組が静岡から三十四人、清水から三十七人、東京現地からの参加者が十五人、合計八十六人の大部隊で六階の劇場へ入る。

「清水の次郎長外伝 恋女房お蝶の奮闘記」の開演は十二時。

次郎長一家、最大のピンチに、立ち上がった次郎長の恋女房お蝶(小柳ルミ子)が、女度胸と明るさで、唄って踊って華麗な立ち回りを演じ、観客を楽しませる。

内助の功といえ、山内一豊の女房だけじゃございませんと、次郎長を支えた初代お蝶の役です。主な配役は、次郎長が中原裕也、都鳥吉兵衛が大門正明、おきぬが風花舞である。

都鳥の吉兵衛をたぶらかし、次郎長一家を潰させようとけしかける謎の男蘭堂を演ずるのは正希光、本名小林正希さん。彼は清水出身で、岡小・二中・東高の卒業。参加者の中で、御子息が同級

生とか、お知合いが幾人かいて、話題がつきない。終演後、「小柳ルミ子・正希光・中原裕也・大門正明」さん四名を囲み、参加者全員で舞台へ上って記念写真を撮る。超多忙なルミちゃんとは、言葉交わすのも遠慮しなければならなかった。観劇が終わってから、約一時間、三越店内で自由ショッピング。みなさん楽しくお買物ができたようだ。

帰りのバスへ乗る前、三越正面入口のライオンをバックに、大内の吉田さんが、宮城島さん、杉本さんと私を想い出にと写真を撮ってください感謝します。

帰路は、首都高速も、東名高速も順調で海老名サービスエリアで休憩、六年ぶりとかの中国大陸からの黄砂がかすむ空を見ながら、参加者のみなさんと楽しく語らい、予定より早めの七時過ぎ、無事に清水に着き、安心した。

編集室から

●英断と言ってもいいだろう。NHKテレビドラマに、いよいよ次郎長が登場。一昨年、国立歴史民俗博物館が幕末のアウトローにスポットをあて企画展「民衆文化のつくられたヒーローたち」を催して以来、劇団俳優座が加藤剛主演で「次郎長が行く」を公演、続いて直木賞作家山本一力が、「背負い富士」をオール読物に連載、テレビの時代劇に、といった大きな流れが続いている。

●足助・岩村旅行、折角御寄稿いただいた松浦元治さんの紀行文、今号のスペース不足のため、割愛しました。お詫び申し上げます。(T)